

フィリピンとの掛け橋

第4号 日本聖公会九州教区宣教局総務部発行

2003年5月28日



「大齋節と私たち」

フィリピン中央教区主教 ボテンガン

2003年 3月 16日 説教・九州教区主教座聖堂

皆さま おはようございます。日本を訪問できたこの機会をお与え下さったことを全能の主に感謝いたします。また、とりわけご当地、福岡に来ることのできたこの恵みと、九州教区における主のお働きについて、皆さまがたの教区から学んだ新しいアイデアを、私たちの教区の働きや伝道を強めるために、もち帰れることを主に感謝いたします。福岡教会の友好関係にあるフィリピン中央教区の兄弟、姉妹からの挨拶をお送りします。先日、行われたタクラバオ主教の主教接手のときには、五十嵐主教と五十嵐夫人、牛島夫人、堀尾司祭にご列席いただき、さらに、コンベンションにもご参加いただき、私どもの代表者たちとも会っていただきまして、ほんとうに嬉しく、心から感謝いたします。私たち2つの教区がパートナーとして互いに助け合っていることは主のお恵みであることを強く感じています。この友好関係を通して、私たちのそれぞれの教区がさらに強められ育てられてきたことをあらためて確信し、神様に感謝するとともに、皆さまがたのご親切と快くパートナーとなって下さったことに感謝いたします。神のみ名があがめられますように、また、神の愛による優しさに栄光があり

ますように。

会衆の皆さま、ここ数年間にわたって私たちの友好関係を進めていくために祈ってくださり、またさまざまの支援をいただきまして有り難うございました。私たちの一人ひとりに神の恵みが雨のように降りそそぎ続けますように、そして、キリストにある輝きが、これからもずっと皆さまの心の中に燃えつづけますように祈ります。

マラミング サラマト ポ サ イニヨ ラハト
(有り難うございます)

今日、キリスト教のカレンダーで、私たちは大齋節の第2主日を迎えました。大齋節というのが何であるかを思い直していただくと、それはすべてのキリスト教徒が自己を反省し、自分を評価し、自分が何をしたかを反省する時です。工業化が高度に進み、変化が非常に速い、この国の皆さんは、ともすれば社会の動きに遅れずについていくことや、社会の要求に応えることに忙しく、自らを省みることを忘れておられたかもしれません。

自意識過剰にならないようにとか、自己中心にならないようにとか、自分の事ばかり考えないようにとか、ずっと教えられてきましたが、この大齋節は、自分を省み、自分と対峙することを求められている時なのです。内なる己に向かい合って、次のような事を自分自身に聞いてみて下さい。「今の自分は、人生のこの時点で、いったいどこに立っているのでしょうか。人生のこの時点で、自分の過ごしてきた道に満足しているのでしょうか。人生のどこかで、自分でも気がつかないうちに、何らかの失敗をしていないのでしょうか。人生について描いたビジョンを、どのようにたどってきたのでしょうか。人の気分を害したり、他人に不愉快な思いをさせたり、また、気がつかないうちに、他人に痛みを与えたことはなかったでしょうか。自分が傷つけられたとき、また自分の思いに逆らわれたとき、それをすぐ赦す心の広さをお持ちでしょうか。あるいは、怒り、憎しみ、怖れ、失望、拒絶感というようなマイナスの反応を自分の中に閉じこめて、

そのような感情を自分の潜在意識としてしまうタイプでしょうか。そうなってしまうと、そのような感情を取り除くことは難しくなり、やがて、背中が痛くなったり、おなかの調子が狂ったり、体中にさまざまな痛みの原因となります。

心理学者や医者は、私たちが苦しめるたくさんの病が、身体的なものでなく、むしろ、私たちが、つらい思いを心の底に埋めてしまって、それが潜在意識となった結果であると何度も指摘しています。また、家族関係、職場関係などからもたらされた困った問題や、ストレスの原因を正面から見すえて解決する事ができないことが、さまざまな病の原因になるのだと、何度も繰り返しています。ただの頭痛とか胃の痛みとか、背中痛みとかであればまだましな方ですが、そのような心の状態は、高血圧、心臓病、潰瘍、胆臓結石、腎臓結石などの原因にもなります。極端な場合は自殺の原因ともなりかねません。

SVD (福音協会) の宣教師でパプアニューギニアに派遣された、ジョン・スエーデ氏についてのエピソードをご紹介します。パプアニューギニアで働くうちにスエーデ氏は背中に執拗な痛みを覚えるようになりました。休暇でマニラに帰ったとき何人かの医師に診察を受けたのですが、診断は腎臓結石で、石が尿管につまっているからだということでした。いろいろな薬が効かないと分かったとき、外科手術をすすめられたのです。スエーデ氏がその手術をうける心の準備ができた頃、一人の修道女から信仰療法を行う人に会ってみてはどうかと勧められます。これはどんな治療法かと言いますと、患者さんの心や体のなかの不純物を、患者さんの体に触れることなく、療法士の手でぬぐい去るのです。

「やってみても別に悪いことは起こらないだろう」と考えまして、彼はその治療を5回受けました。とても驚いたことには、一回目では普通の治療らしいことは何もしないのです。ただ、自分が心ならずも感情を害してしまった人びとの赦しを乞うよう祈りなさい、また、自分の感情を害した人のために祈りなさいと、言われるだけだったのです。

この「悔い改め」reconciliation (和解) の後初めて、その女性の宗教療法士は、体の清めに入りました。5回の治療が終わったとき、療法士は「あなたはもう直っていますよ。病院に行って確かめてご覧なさい」と言うのです。本当でした。病院でレントゲン撮影の結果、彼を悩まし続けた腎臓結石は確かに跡形もなく消えていたのです。

兄弟姉妹の皆さん、すべての人と仲良く平和な気持ちを持って下さい。それこそが体の癒しとなる最も重要なポイントなのです。だからこそ、イエスは自分の罪に気がつかない私たちをお赦し下さって「息子よ、あなたの罪は許された」とおっしゃって下さっているのです。イエスに癒しを求めてつきまとったカナンの女性、目の不自由なバルテマイについても同じことが言えます。まず、彼らは自らの罪ある生き方を認め、それを告白いたしました。かれらは、イエスが自分たちを癒して下さいことを堅く信じて、何度もなんども、イエスに呼びかけています。彼らの罪の赦しが認められたとき、初めて癒しが起きたのでした。

大斎節は、私たちが意識、無意識のうちに傷つけたかもしれない人びととの和解を通して、癒しが働く最高の時です。ニューギニアに派遣された宣教師のように、私たちが犯した罪やさまざまな間違いに対して、神に心から赦しを求めて、神に向かい合うとき、それが大斎節だと思います。

賛美歌に「祈りの内に神にゆだねる」という言葉があります。大斎節は、自らの心を開いて、すべての汚れと心の奥底に溜めている、すべての否定的な思いとを、あの宗教療法士がしたように、神がそれらを私たちの心からぬぐい去って下さる時なのです。そうすれば、私たちは新しい命を与えられ、生まれ変わり、イースター - 復活祭 - の日に、イエス・キリストによってもたらされる新しい命の恵みに喜んであずかることができます。アッシュ・ウエンズデイ (灰の水曜日) の特禱で「悔い改めるすべての罪人を赦して下さいように、悔い改めの心を新たに起こして下さいように、私たちが罪を悲しみ、その災いを悟り、完全な赦しと平安にあずかることができるように」と神にお願いしています。

〈祈禱〉 主よ、どうかこの大斎節に、あなたの前に謙虚に己を投げ出すことのできる勇気をお与え下さい。また、私たちが新しい人となって生まれ、神に忠実になり、もっとあなたに近づけますように、私たちに強め、罪を拭い去り、あなたの赦しが得られますように、私たちの信仰をより強くして下さい。主のみ名によって祈ります。

アーメン

(訳 板倉 武子)

「フィリピン中央教区報」より

*フィリピン中央教区から、新主教の就任や、ボテンガン主教の日本訪問などが報じられた教区報が届いたので紹介する。昨年やってきたラブテン司祭のことも書かれていた。

2003年4～5月号

第4代フィリピン中央教区主教就任式

デキシー・タクロバオ主教は、イグナシオ・C・ソリバ首座主教の司式で、第4代のフィリピン中央教区主教に就任する予定である。就任式は、マニラのマサングカイ通りにある聖ステファノ教会で2003年8月17日、午前9時45分から行われる。タクロバオ主教は48歳。神様のお恵みを得るなら、2020年まで17年間教区主教として働くことになる。一方、現第3代のベンジャミン・G・ボテンガン主教は65歳になる8月1日で引退する。彼は1996年5月26日、前の聖三一主教座聖堂で按手・就任した。彼は7年2ヶ月と6日働いて8月1日に引退する予定。

日本や日本聖公会との関係強まる

フィリピン中央教区との協働関係にある九州教区の五十嵐主教は、ボテンガン主教を2003年3月5日から18日の2週間、ボテンガン主教を日本へ招いた。訪問の目的は、両教区の宣教における協働関係を強化するためである。この訪問は、ボテンガン主教がここ数年奉仕してきたフィリピン中央教区に対する確固とした支援と祈りについて、九州教区の組織、会衆に、感謝を述べる機会を与えた。また、この訪問は、ボテンガン主教に、次期教区主教であるデキシー・タクロバオ主教につながる協働関係を継続する道を整える機会を与えた。

はじめの2日間は、東京を訪問した。そこでは植田東京教区主教、ガブリエル教会会衆、聖マーガレット短大（立教女学院）理事長の竹田主教、チャプレン中村司祭、そして聖三一教会教会委員会、カワムラ姉と原姉の聖書学習グループ、原姉のレインボーグループ、聖パウロ中学校（立教）の校長とチャプレンに会った。

日本での第3日には、横浜の山手聖公会で、フィリピン中央教区の支援をしている山手聖公会の婦人会と昼食をともにした。

北海道教区の訪問では、札幌の聖マーガレット教会で

の説教もあり、会衆や、モイワシタグループという、教区の衣類と金銭の支援で教区のいろいろなプログラムを行っているグループにも会った。

そのうち、夕食での話し合いでは、植松主教と常置委員会に、両教区で話し合ってきた協働関係のプログラムの可能性について語った。北海道教区は、リサールのバンリックにおける地域の井戸掘りの中心的支援者である。

強まる関係

第2週は、九州教区で過ごした。会合は、フィリピン協働委員会によって計画され、協働教区としてさらにプログラムが話し合われた。ボテンガン主教は福岡の主教座聖堂で説教し、会衆と懇談した。

五十嵐主教や会衆、フィリピン協働委員会で話し合われたことは、

1. 今年、九州教区から2人の司祭をフィリピン中央教区に3ヶ月派遣する。
2. 聖アンデレ神学校の1～2名の神学生の学費支援の約束。
3. 今年、フィリピン中央教区から1名の司祭を3週間、九州教区へ派遣する。
4. 来年のいつか、タクロバオ主教夫妻を招待する。
5. 五十嵐主教夫妻とフィリピン協働委員会、また主教座聖堂参事会は、タクロバオ主教の就任式に参加し、いくつかの教会を訪問する。
6. お互いの教区の代祷表のリストに継続して加えて行く。

フィリピン中央教区は、ボテンガン主教の旅行のために尽力くださったアグネス原姉に感謝する。



3月15日（土）ボテンガン主教歓迎会・福岡

ラブテン司祭

— 九州教区へフィリピン中央教区から

ら最初に派遣された司祭

ダグラス・ラブテン司祭（リサールのケインタにある聖信仰教会の牧師であり、マリラクエの首席司祭）は、中央教区から交換司祭として最初に2週間九州教区へ訪問した司祭である。彼は九州教区のいろんなところへ旅をし、その教会や会衆と相互交流の経験をしてきた。

ラブテン司祭は、次のような観察をしている。ネヘミヤの状況は、フィリピン中央教区や九州教区と似ている。私たちの教区には若い人たちがほとんどいないことが、悩みになっている。ネヘミヤのように、若い人たちに呼びかけることによって、フィリピン中央教区も九州教区も“再建”を始められる。

九州教区にいる間、彼は対馬で26人のフィリピン女性のグループを訪ねた。彼はそのグループのためにフィリピン語で聖餐式を行った。

ラブテン司祭は、2週間の九州教区での務めから帰ってきて、疲れたが、満足しており、すっかり日本食の専門家になった。

彼は、このプログラムが継続し、もっと多くの聖職が互いの教区から交流して彼のような経験ができるように願っている。彼は、プログラムによって関わるすべての教会の人が、とは言わないが、よりよい牧師になるために、この経験からの良い影響があることに確信をもっている。

タクロバオ主教、活動開始

デキシー・タクロバオ主教は、2003年4月1日に、公式に主教業務を始めた。聖マリア聖ヨハネ主教座聖堂の主任司祭としての最後の仕事をしたのは、2003年3月30日だった。この時、新しい主任司祭のジョエル・デル・ロサリオ師が就任した。

その時から、タクロバオ主教は、ケソン市ロドリゲス通り281Eのフィリピン中央教区の事務所で働き始めた。彼はボテンガン主教に教区を案内されてきている。ボテンガン主教は、公式に、教会の会衆や、教育機関に新主教を紹介することを望んで行っているのである。ボテンガン主教は、タクロバオ主教の就任式までに、それが終わるだろうと思っている。

ボテンガン主教からの手紙

2003年4月23日

親愛なる五十嵐主教様

ケートと私から、復活日の御挨拶をあなたとあなたの家族に送ります。

私は、タクロバオ主教の就任式について申し上げます。私は既に首座主教から次のような言葉を聞いております。私は65歳になる2003年8月1日に退職しなければならない、ということです。私は、今年の最後の日である12月31日に退職することを希望していたのですが、首座主教が既に8月1日に退職するように告げていますので、10月に韓国で行われる東アジア聖公会協議会の会議には出席できません。

退職の時期から見て、デキシー・タクロバオ主教の第4代フィリピン中央教区主教への就任は、2003年8月17日、マニラの聖ステパノ教会で午前9時45分からになりそうです。それが教区での私の最後の公式な行事ということになるでしょう。

外国人学生の神学校での費用については、聖アンデレ神学校から先頃そちらに送った印刷物で見てください。それを見れば、そちらが牧師を派遣した場合、私たちの教区で生活を体験したり、トゥリニティ・カレッジで英語を勉強するのにどれくらい費用がかかるかわかるでしょう。率直なところを教えてください。お膳立てできると思います。

そちらの多くのフィリピン協働委員会の人々や、主教座聖堂のメンバーが、タクロバオ主教の就任式においでくださるよう期待しています。

神様があなたとあなたの教区の宣教を祝し、支えてくださいますように。

教区の私たちの多くの友人によろしく。

敬具。

ベンジャミン・G・ボテンガン

九州教区が支援するツギネイ神学生

から、感謝の手紙

2003年4月21日
親愛なる五十嵐主教様



私たちの主の御名によって御挨拶申し上げます。

信仰の兄弟姉妹が助けてくださっていることを知って、心温まり、元気づけられました。私の神学校に対する経済的必要を、皆さんが提供して下さるということを、私の主教ベンジャミン・G・ボテンガンから、知らされました。大変ありがとうございます。

私の名前は、マリオ・B・ツギネイと申します。私はヒンギョン、イフガオの生まれです。しかし、出身教会としては、フィリピン中央教区に属しているケソン市にあるフェアビュー復活教会です。私は1966年10月1日生まれ。私たちは6人家族。私は5番目の子どもです。4歳の時にはもう孤児になりました。私の母は、平凡な主婦で、私たちのひとりを学校へ行かせる余裕もありません。私に少しでも上の教育を受けさせることは、大変困難なことで、犠牲が伴います。私はハイスクールの頃から働きながら勉強してきました。大学では、仕事をしながら初等教育のための学士コースに着手しましたが、前述のような理由で、それを終えることができませんでした。聖職への関心が、私を神学校へと向かわせたのですが、経済的必要が、また私に、聖職として主に仕えることを追求する機会を中断させようとしていました。私の家族には私の経済的必要を、部分的にでも提供できる者は誰もおりませんでした。来たる学年度、私は最上級生になる予定です。私が主のぶどう園の労働者のひとりになるという夢を実現するための皆さんからの援助を知らせてくれる私の主教からの知らせは、本当に折の良いものでした。本当に皆さんに感謝いたします。そして、皆さんの働きを神様が支えてくださって、私と同様な人々を援助くださいますよう、祈ります。最近の私の写真と、私の期末試験の成績を参考に添付いたします。私についてもっとお知りになりたければ、自由に私にお聞きください。

皆さんからの問い合わせを喜んでお待ちしております。私

への電子メールは、Linnawa2002@yahoo.com です。折に触れて、この神学校での私の活動についてお知らせしたいと思います。

皆さんの親切で誠実な支援に敬服いたしました。もう一度、感謝を申し上げます。皆さんに聖週の実り豊かな祝福がありますように。

敬具。

マリオ・B・ツギネイ 聖アンデレ神学校学生

フィリピン中央教区との協働関係の祈り

慈しみ深い主よ、あなたは天地創造によってあなたの力、あなたの支配、あなたの正義を現わし、御子イエス・キリストによって深い愛を現してください。主を賛美するために選ばれたわたしたちは声を一つに合わせ、あなたに感謝・賛美の祈りをささげ、多くの人々に御恵みを分かち合う働きができるようにお導きください。特に、共に祈り、励まし、キリストの働きを担う器として与えられたフィリピン中央教区との協働関係を祝し、用いて、あなたのみ栄えを現わすことができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン



編集後記

今回は、フィリピンからの情報ばかりが多くなりました。現在、九州教区としては、8月17日に行われるタクロバオ主教の教区主教就任式への出席や、3ヶ月フィリピンへ派遣する司祭の人選などを考

慮中です。

また、今年もフィリピンから3週間程度、日本に来て、各地で交流する人の受け入れ態勢など、準備中です。

発行所 日本聖公会九州教区宣教局総務部
〒810-0045 福岡市中央区草香江2-9-22
日本聖公会九州教区事務所内
電話 092-771-2050
E-mail d-kyushu@try-net.or.jp